

# 高等学校の総合的な学習の時間における授業改善の試み —地域教材を取り上げた学習内容と教授方略—

M13EP007

廣瀬 志保

## 1. はじめに

総合的な学習の時間(以下 総合学習)は「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする」(学習指導要領高校編)という目標のもと、各学校で地域や学校、生徒の実態に合わせて、特色ある教育活動を展開するものである。しかし、高校現場では相変わらず、生徒の知識の吸収と蓄積を重視した一斉授業が行われ、総合学習も根付いていないと言われている。昨年 11 月の、下村博文文部科学大臣の初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)の高等学校教育については「より探究的な学習活動を重視する視点からの『総合的な学習の時間』の改善の在り方」が挙げられ、探究やアクティブラーニングが重視されている。そこで、本研究では地域の特徴を生かした課題解決型の総合学習はどうあるべきかについて検討していくこととした。

## 2. 研究の目的

総合学習で育もうとしている自ら課題を解決できるような資質能力の育成、加えて現代の教育目標となっているコミュニケーション能力の育成や自己効力感の育成、社会への参画意識の形成などを達成すべく以下の方法を取り入れた授業を構成した。本研究の目的は、次の 4 点について検証することである。

(1) 多様な学び方やものの考え方の教授

(2) 主体的な活動の保障

(3) 社会参画意識の形成

(4) 生徒自身の発表のモニタリングによるプレゼンテーション能力の形成

これらの 4 点について詳しく述べる。

(1) 学び方やものの考え方を身に付けることに関わって、生徒達の学ぶための情報入手の手段は、書籍やインターネットに限定されている。そこで、情報入手の手段を広げるため、校外でのインタビューやアンケート調査などによる情報収集の方法やその有効性を教授する。また、考え方については、KJ法やマトリックス表などのシンキングツールを教授する。そして、その効果を生徒の有効性に関する認識の面から検証する。

(2) 「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断すること」に関して、これらは内発的動機づけに基づき保障される活動であろう。この内発的動機づけを保障するための 1 つの方法として、同じ進路目標を持つ生徒で班構成をする。このことにより興味関心が共通するため、課題の設定しやすさ、課題への熱心な取組みに繋がると考えられる。

また、現実の社会に有用な結果をもたらす可視化できる目標と、その実現に向けた HOW TO 型の課題設定をすることで、内発的動機づけを喚起することを試みる。

併せて一連の授業の中では、教師はファシリテーターとして関わるように務めた。

これら 3 つの方法が、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断すること」に及ぼす促進的効果の検証を行う。

(3) 高校での総合学習では、発達段階に合わせ、実社会との関わりを重視し、将来地域を支

表 1 授業計画

えるであろう高校生に社会参画の意識をもたせ、働くことの意味を考えさせる機会となる。したがって、学習対象を身近な地域や現実の社会にある問題の解決に向けて地域に限定した内容を扱うことは、社会参画意識の形成や地域社会の担い手としての自覚をもたせるのに有効ではないかと考えられる。そうした観点から、課題を地域の問題に限定し、その限定が社会参画の意識や地域の担い手の一員と

日時	過学習	学習活動	教師の手だて
1 5/6	課題設定	理想の未来の山梨像を描き、現状把握をする。それらを比較することから、山梨の観光やおもてなしに関する課題を明らかにする。班編成をする。	理想と現実の比較から課題に気づかせる。当事者意識を持たせることができるような課題を設定させる。同じような進路目標を持つ生徒で班構成をする。
2 5/20		山梨県観光課外部講師による山梨の観光とおもてなし講演会 プレゼンストーミング、KJ法で課題の抽出をする。	シンキングツールを利用した、思考の拡散と収束の方法の教授をする。
3 6/3		班ごとにテーマを確定し、目標や仮説の設定、具体的な行動計画を立てる。	各班のテーマ設定に対して、教師が見通しを持ち、計画と目標を明確にさせる。
4 6/10	情報の収集	山縣館取材、電話取材、アンケート作り、文献調査等	情報収集の方法の教授をする。地域(外部)との関わりの支援をする。
5 6/17		アサブラージュ山梨取材、塩山消防署取材、電話取材等	
6 7/1	整理・分析	収集した情報の集計をし、マトリクス法などの方法で整理する。整理したデータをもとに課題解決の方向性の検討と、中間発表の準備をする。	マトリクス法などの整理分析の方法を教授する。効果的なグラフの検討をするよう誘導する。
7 7/3	まとめ・表現	中間発表会を行い、外部講師、山梨県観光部、校長、教頭の助言と生徒同士の相互評価をする。	他班の進捗状況を見て、自班の課題解決学習のテーマや探究内容の再検討を促す。授業担当者以外の大人からのアドバイスをもらう。
8 7/16	再検討	自分の班の中間発表の様子をビデオで見て振り返る。プレゼンミニ講座、改善点を明確にさせ、計画の再検討をさせる。	ビデオカメラに録画した生徒自身の発表をモニタリングさせることによって、中間発表の振り返りをさせる。
9 夏期休業	実践	県立科学館でパンフレットの配布とアンケート調査。ワイン販売店へのポスターの配布と広告効果の聞き取り。避難経路の看板設置。CMの制作。保育園等での紙芝居の実践。等	HOW TO型の課題解決と県への提案という最終ゴールに向けての目的を明確化する。成果物を外部に評価してもらえる場の創出をする。
10 8/26	まとめ・表現	進捗状況の確認とパワーポイントでのまとめをする。レジメの提出をする。プレゼンテーションで話す内容の確認をする。	まとめ方、表現方法のアドバイスを。効果的にプレゼンテーションソフトを使った発表をするためのアドバイスを。する。
11 8/30		下級生、校内の教員等の前でリハーサルを行う。	多くの人からアドバイスをもらえるような会を経験させ、観光部や教育委員会の方々の前でも自信を持って提案ができるよう準備をさせる。
12 9/1		山梨県庁防災新館1Fにて、山梨県観光課 山梨県観光振興機構 山梨県教育委員会 甲州市観光課 等へ、「山梨の観光とおもてなし」についての提案をする。	外部への提言という機会を設定する。生徒には実践していることが、実社会と結びついていることを実感させる。
13 9/9		600字程度の意見文を書く。活動の振り返りをする。	外部からの活動に対する評価を伝える。考えたり感じたりしたことを意見文として新聞に投稿する。

しての意識の形成に効果が認められるか検証する。

(4) 言語活動の充実は小学校から高校を通じた教授目標になっている。関連して、生徒の実態を眺めたときに欠けているものにコミュニケーションの能力、特にプレゼンテーション能力がある。その改善のために、本授業では、自らのプレゼンテーションを対象化して改善しやすくするための方法として、生徒自身の発表をビデオカメラに録画し、その視聴によってモニタリングさせる。このことによって、プレゼンテーション能力に向上がみられるか検証する。

### 3. 研究方法

(1) 実践校・授業期間・授業形態

- ① 実践校：山梨県立高校3年生 26名
- ② 授業期間：2014年5月～12月
- ③ 授業形態：火曜日6校時 50分授業

(2) 仮説検証の方法

- ① キャリア教育の意識調査(4月・12月)
- ② ポートフォリオ評価(以下 OPPシート)
- ③ 生徒の意見文の記述(以下 意見文)
- ④ 中間発表後のプレゼンテーションに関する課題の克服方法に関する調査
- ⑤ 県庁での提案後の意識調査(以下 意識調査)
- ⑥ 教師へのアンケート調査
- ⑦ 外部講師や連携先の担当者による評価や感想(以下 外部評価)
- ⑧ 動画資料(中間発表、プレゼン練習、リハーサル、県庁での提案発表会)

### 4. 授業実践

(1) 授業の概略

前述の地域に限定した内容の学習という観点から「山梨の観光とおもてなし」を大テーマに設定し、県の観光課と連携した取り組みを計画した。4月から9月までの合計13回の授業の概略をまとめたのが表1である。

## (2) 班での活動

各班が行った活動状況を紹介します。

### ○1班 メディアを使った広報

「CMによる山梨の魅力アピール」をテーマにしたこの班は、You Tube で見ることでできるCMの題材やストーリー性、ユーモアの観点などを分析し、CMの製作に取りかかった。はじめの作品は富士山や名所を盛り込んだ。完成度は高かったが、一般的な内容であったため、高校生らしさをより前面に出そうと作り直し、ほうとうを食べる男子生徒を主人公にした「山梨ストーリー～ほうとうは突然に～」という作品を作った。県への提案は「ふるさとCM大賞」の開催や、海外へのPRのために、CMに他言語の字幕や手話通訳を入れることを提案した。

### ○2班 郷土愛の心を育む

教育方面の進学を考える生徒が集まったこの班は、「山梨の魅力子どもたちに伝える」をテーマにした。中学校や高等学校では地域学習に関する講演会などがあり、小学校高学年向けには学習ノートが用意されている。しかし、未就学児や小学校低学年対象には地域観光学習教材がないことがわかった。そこで、園児や小学校低学年の児童にも山梨について知ってもらい、より郷土を好きになってほしいと考えた。山梨の民話「富士山と八ヶ岳」を調べ、参考資料から内容や言葉遣いなどをわかりやすくアレンジし、イラストからも話が読み取れるよう工夫して紙芝居を作った。併せて、子ども達と一緒に遊ぶ活動も盛り込むために、山梨の名産果物でチーム分けしたフルーツバスケットやクイズも考えた。

実際に地域の保育園で実践をし、子供たちの感想や先生方のアンケートを得た。実践の課題を明らかにし改善して、児童館でも同様の実践を行った。児童と先生方のアンケートからは山梨についての理解の深まりが実感できた。将来的には、県民一人ひとりが山梨の観光大使として地元の魅力を発信出来る存在になれるよう、低年齢向けの教材の作成を提案した。

### ○3班 災害時の安全対策

消防士や警察官など公務員を目指す男子5名のこの班は「自然災害時の観光客の安全対策」をテーマにした。東海沖地震や富士山の噴火を想定して災害時の観光客への対応について消防署、市役所などで取材を行った。各施設には防災マニュアルを作成する義務があり、防災訓練も義務付けている。しかし、観光客には避難場所やその経路がわかりにくいことがわかった。

この点に着目し、学校の近くにある武田信玄の菩提寺である恵林寺の避難経路について詳しく調べた。避難所までは3つの経路がある。実際に歩いてみると、道幅が狭かったり、ブロック塀が崩れる危険性があったりした。そこで、距離と安全性を考慮して選んだ避難経路を示すため、看板を作製した。地図や文字を大きくし、景観をこわさない工夫もした。出来上がった看板は恵林寺の境内の表玄関に設置してもらった。県には各施設に避難誘導のための看板などを設置することを提案した。

### ○4班 特産品の販売拡充

理系に興味がある男子生徒が集まったこの班は「甲州ワインを日本に広める」というテーマで甲州ワインの良さを広め、地域活性化を目標にした。

甲州市内の若手醸造家をインタビュー取材し、甲州ワインの海外での評価や他のワインとの違いなどを聞き、その内容をもとにアンケート調査を行い84名から回答を得た。ワインの飲酒できる世代がアンケート調査の対象なので、卒業生や地域の方、保護者や教員にも協力を求めた。

調査結果の傾向で顕著だったのは40・50代では甲州ワインを好んで飲酒する人が多かったが、20・30代で甲州ワインを飲酒している人の割合は少なかった。また、アンケートを通じて甲州ワインの特徴はさっぱりして飲みやすいために、多くの料理に合うことがあげられた。スイーツにも合うという回答も複数あった。

そこで、若者世代へのPR方法が鍵だと考え、美術部の協力を得て、若いカップルが甲州ワインを飲みながらおしゃれに食事を楽しんでいる様子をポスターにした。完成後は甲州市内のワイン販売店や土産物店、観光施設にポスターを掲示してもらった。事後の聞き取りでは来店者が興味を持ってくれた例もあった。ターゲットを絞り、甲州ワインのよさを伝え、販売拡大につなげることを提案した。

#### ○5班 冬の旅行計画作成

資格を持って社会に貢献したいと考える女子4名のこの班は、「山梨の星の魅力を発信できる冬の旅行計画を作成」をテーマにした。2月の観光客数の減少を改善することと、山梨の魅力である星が美しく見えることを多くの人に伝えたいという思いから探究がはじまった。

以前、学校行事で訪問した山梨県立科学館の天文アドバイザーに取材を依頼し、山梨の星事情について聞いた。同時に、山梨県内の星空観望スポットや星石や星にまつわる行事や伝説を調査した。また、山梨の星に関わりを持った人々の話を取材した。例えば、韮崎市出身の保阪嘉内はハレー彗星をスケッチし、そのスケッチが親友、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」のモチーフになったことや「甲府の星空が私の原点」と、土井隆雄さんが宇宙飛行士になったきっかけが山梨にあったことなどである。

収集したデータを再構成し、女子高生の視点で「ほしめぐり in 山梨」として手書きのパンフレットを作成し、山梨県立科学館で来場者に配布した。星の情報を広めるのと同時に2月にあったらいいと思う星のイベントについてのアンケート調査を実施した。アンケート結果はマトリクスに落とし込み、実施の可能性が高く、楽しめる案を採用した。

バレンタインデーに保阪嘉内が流れ星をスケッチした甲府駅を出発し、韮崎の銀河鉄道公園にて嘉内の関係者に話を聞き、八ヶ岳山麓で星の観察をする「銀河鉄道ツアー」を提案した。

2月に星に関するイベントを行うことで、観光客の増加をはかることが、山梨の魅力を多くの人に気づいてもらえるきっかけになるのではないかと提案した。

#### ○6班 健康とバリアフリー

医療・福祉系への進学希望者が集まった班は「山梨の温泉とおもてなし」をテーマにした。信玄の隠し湯と言われている8か所の温泉を取材し、県外からの来館者へのおもてなしや、障害のある人に対する配慮について調査した。地産地消の献立、外国語の観光案内の用意、手話で会話ができる宿もあった。県のホームページでは、字の大きさに配慮してほしいことや、信玄公まつりのHPにも信玄の隠し湯情報を載せたらどうかと提案をした。

○以上の活動は、外部機関の注目も集め、以下で取り上げられた。

- ・山梨日日新聞 8月31日「若者の知恵で観光振興」
- ・山梨日日新聞 9月2日「魅力的な観光振興策」
- ・山梨日日新聞 10月7日「おもてなし観光地域実態を調査」
- ・朝日新聞 10月7日「山梨冬の夜空は『星の名産地』」
- ・山梨日日新聞 10月25日「甲州ワインの魅力を広げたい」
- ・山梨日日新聞 1月15日「高校生の提案収録」
- ・やまなし観光推進機構 12月「観光&イベントブック冬号」23万部
- ・山梨県観光課 12月「おもてなし推進月間パンフレット」3万部

## 5. 結果と考察

研究のねらいで述べた4点について、生徒の活動や感想をもとに考察を行う。

### (1) 学び方やものの考え方の教授

①多様な課題設定時のシンキングツールの有効性

課題設定時に、班毎にブレインストーミングを行って拡散的思考を促し、KJ法で整理して類

型化を図った。

意識調査の問1より、皆でアイデアを出してグループで考えるのはあなたにとって、勉強になったと答えた生徒は25人で96%であった。(以下、枠内の記述は理由として生徒が記述したもの)

- ・自分と違った意見(違った価値観)を学び、取り入れることができた。(23人)
- ・話し合いの大切さを実感した。(20人)
- ・協力することや、協調性を学んだ。(12人)
- ・意見をまとめる能力が必要だと思った。(6人)
- ・自分の意見を言うことができた。(5人)

OPPシートには「グループの中でみんなが思っていることを交換することによって、さらに意見が広がっていると思った」と記述している。また、ブレインストーミングとKJ法を使い課題設定をする活動は、授業中の見とりや、生徒の記述より、班での話し合いに全生徒が参加でき、話し合いの中で、新たな価値観を吸収することができたことが確認でき、その有効性が教師の目からも確かめられた。

### ②情報収集の方法を教授する有効性

有効と思われる情報収集の方法を12種類教授した。生徒が行った活動は表2の9種類である。

表2 情報収集の方法と実践した班

情報収集の方法	1班	2班	3班	4班	5班	6班
アンケート調査	○	○		○	○	○
インタビュー		○	○	○	○	○
電話やFAXで取材					○	○
電子メール			○		○	
書籍		○	○	○	○	○
インターネット	○	○	○	○	○	○
フィールドワーク			○	○	○	○
実習を通して		○			○	
情報の蓄積方法	○	○	○	○	○	○

意識調査の問2より、地域の人などに調査を行いました。このインタビューやアンケート調査が勉強になったと100%の生徒が回答。

- ・直接聞くことで、詳しい内容や新たな考えがわかった。(24人)
- ・インタビューをすることによって、コミュニケーション力がついた。(6人)
- ・柔軟な考えができるようになった。(6人)
- ・話し方や電話での対応、礼儀を学んだ。(4人)
- ・発信することの大切さを学んだ。(2人)

OPPシートにも「アンケート調査を行い、年代別、男女別に意見をまとめたので、新しい発見があって面白かった。いろいろな人の立場になって考えることで新たな発見や課題を見つけることができるようになった。」など、より広範囲の深化した情報収集が可能になった。また、地域の方との対話で、コミュニケーション力の向上を自覚した生徒も多かった。

### ③整理・分析の方法を教授する有効性

意識調査の問3より、地図、マトリックス表などを使った整理・分析について23人、88%の生徒が勉強になったと回答した。

- ・どうすれば伝わるか、まとめ方を学び、対策を考えることで活動内容の深まりを学んだ。(17人)
- ・結果から考察することの大切さ。(11人)
- ・魅力が伝わる効果的な方法は何か。(8人)
- ・協力することを学んだ。(4人)

シンキングツールの活用により、収集したデータが整理され、班員全員に視覚化でき、分析する過程では得られた情報を活用した活発な思考の場面が見られた。より高次の思考を導くために効果が見られた。

①～③の結果から、学び方やものの考え方の教授をすることにより、生徒たちは学習の質の高まりを実感しており、その有効性が検証できたといつてよいであろう。

### (2) 主体的な活動の保障

#### ①同じ進路目標を持った生徒での班構成

6班の生徒はテーマ設定のキーワードを「健康」にし、温泉とバリアフリーを軸に探究活動が進んだ。OPPシートには、「自分たちの将来のことを見据えて医療に関わる取り組みをしようと考えました」と記述している。

また、2班の生徒は「保育希望者が集まったので、テーマ設定が子供を対象とした」と記している。3班の生徒も「公務員希望者が集まっていたので、身近な地域を調べた」、「同じような考えで個人ではなくグループで活動したことで、協力できてよかった」と記述している。

市役所や消防署のインタビューを行うなど、進路目標に関わりのある場所を選び、課題の設定や課題への取り組みを積極的に行った。

一方、全ての生徒の進路分野がグループ分けの人数と合うわけではなく、多様であった班もある。女子4人の5班は進路の分野は異なったが、資格を取得し、女性として社会で自立したいと考えている生徒が集まった。現状分析を的確に行い、そこからテーマを絞り、明確な目的意識を持って積極的に課題解決に臨んだので、班編制は有効に働いたと思われる。

しかし、進路分野や目標が多様でテーマ設定がはかどらなかつた班もある。1班の生徒は「それぞれの意見が上手くまとまらず、苦労しました。一度は、撮影を始めましたが、うまく山梨の魅力について語れず、内容を考え直すことにしました」と記している。CMでPRを考えたが、その内容が次々と変わり、納得のいく作品にたどり着くまでに時間がかかった例である。

このことから、同じような進路目標の生徒で班分けをすることによって、興味関心が高まり、主体性が増すと考えられる。同時に、同様な進路目標による班構成は、教師にとっても探究テーマの見通しを立てることができ、方向付けをすることが容易になることも明らかになった。

## ②HOW TO型の課題設定

OPPシートに、5班の生徒は「県立科学館で実際に作ったパンフレットをプラネタリウム来場者に配りましたが、その際に喜んでくれてとてもうれしかったです。」「星のパンフレットを配ると、大人も子どもも大変喜んでくれて本当に嬉しかった。やりがいを感じられた瞬間だった」と記している。

課題解決の途中でパンフレットやポスターのような成果物が実社会で活用され、外部から評価されることは、生徒に大きな喜びと有用感、探究に対するモチベーションの高まりを生むことが認められた。

また、4班の生徒は「県への提言を行い、自信がついたと思う。後輩にも是非この取り組み

をやってほしい」と、ゴールが明らかになってきたことで主体的な活動が促進したと記述している。

県への提言とし、観光部次長や教育長などに対して発表をするという行動レベルの最終目標を達成したいという思いが生徒の主体的な活動を後押ししたと考えられる。

## ③ファシリテーターとしての教師の役割

生徒の活動途中では、内容への介入ではない声かけと、OPPシートへのコメントの工夫を心がけた。コメントに対して再度生徒が応答してくるなどその有効性を感じた。

しかし、1班のCM作りでは情報収集の方法がインターネットからの情報に限られ、探究に広がりが見られなかったため、成果物としてのCM映像に対して教師や外部の有識者からのアドバイスや評価が多くなってしまった。

意識調査の各設問に対して否定的な回答したのは1班の生徒であり、外部からのアドバイスを消化できなかったことが推測される。

「最初は全員が意見をいい、活発な話し合いが出来たと思うが、後半になるにつれ先生の言った意見ばかりが使われるようになり高校生らしさが失われた気がした。」「先生方や外部の方に指摘を頂けるのはうれしいが先生方の意見が違いすぎて、どれを考慮したら良いのかわからない」という記述からも、主体性が確保できず、生徒の中にはやらされている感が生まれてしまったことが読み取れる。

教師の関わりはプロセスに関する関わりにとどめ、ファシリテーターとして道筋を付けることが生徒の内発的に動機づけられた学習を保障するために大切であると実感した。

## (3) 社会参画意識の形成

意識調査の問5では、全員の生徒が山梨の魅力を再発見し、地域活性化につながられたと記述している。

また、OPPシートの記述にも、「経験を重ねることでひとりでも取材先の人としゃべれるようになった」など、地域の人に対して自分たち

の活動の趣旨や目的を説明し、様々な協力依頼をして課題の達成に向けて行動した様子が記されている。

「自分たちの班がやってきたことは今後の山梨にも自分たちにも活かせるものではないかと思っている」「将来自分が山梨県民としてできることに極的に取り組み、おもてなしに貢献していきたい」など、自分自身と地域の将来を考えはじめた生徒もいる。

「自分たちでもっと良くするための課題を見つけることができた。そして、その課題を解決するための案を考えると更に山梨の良い面や悪い面を見つけることができた」と課題解決がスパイラルにつながっていることを見出した生徒もいる。

意見文には、「活動を通して知らなかった山梨に出会えた」など、郷土や地域の良さを再発見し、より好きになったという記述が多かった。3班の生徒は「山梨県がもっと人々の住みやすい環境になればよいと思っています。私自身も山梨県をもっとよいところにしていきたいです」「いつ災害が起きるかわからない中、私たち高校生がしっかりすることが大切だと思います。今回のことを身近で生かしたいと思いません」と社会参画の自覚が生まれている。

4班の生徒は「私たちの地域は私たち自身でよく変えていくことが大切だと感じた。これからも探究心を持って、地域の一員として自分にできることをしていきたい」と記している。地域の課題に当事者意識を持って取り組むことが、社会参画への意識を高め、自立して社会生活を送るための実践力になっていった例である。

#### (4) 生徒自身の発表のモニタリングによるプレゼンテーション能力の形成

一定の成果が出たところで、外部講師を招いてクラス内で模擬的な中間発表会を行った(後日、本番の県庁での発表会を予定していた)。そのようなすをDVDに録画し、生徒たちにフィードバックした。そのときの感想を以下に示す。

- ・原稿ばかり見て前を向いていない。(18人)
- ・マイクを使っても声が小さい(18人)
- ・棒読みでインパクトがない。(4人)
- ・PPTがわかりにくい。資料が足りない(19人)・立ち居振る舞い。姿勢が悪い(15人)
- ・話し方がわかりにくい。(6人)
- ・自信がなく、視線が定まっていない。(9人)
- ・他の班員が話している時によそを向いていた。頷くなどすれば良かった。(3人)

自らの発表のモニタリングによって、姿勢や声の大きさ、視線の方向などの問題点が浮かんできた。反省点として挙げた点の改善策やポイントをミニ講座として教授し、プレゼンテーションに対する改善を促した。県への提案会の前には下級生や教員に向けてのリハーサルも行って、本番を迎えた。

意識調査や意見文には100%の生徒がよくできた、勉強になったと回答している。

- ・より効果的なプレゼンの方法(恥ずかしがらず、大きな声で、わかりやすく)を学んだ。(20人)
- ・プレゼン経験値が上がり、自信がついた。(15人)
- ・相手に何を伝えたいのか、工夫した点は何かをはっきりと話す。(10人)
- ・発表時の挨拶や、立ち居振る舞い。(6人)
- ・PPTにまとめることやまとめ方。(3人)
- ・他班の取り組みを聞いて勉強になった。(3人)

「発表に爽快感のようなものを感じた」「自信を持って県の人たちに自分たちの設定したテーマ、そして伝えたい課題点について発表できたと思う」「発表する前は緊張をしたが、相手にわかりやすく伝えようという思いから本番ではよい発表をすることができた。この活動を通して私は自分に自信を持てるようになった」など、表現は異なるが達成感が窺えた。

県庁での発表では、緊張のあまり過呼吸になった生徒がいたが、自らの意志で発表に臨み成果を上げた。「すごく緊張していて、不安でいっぱいだったけれど、自分たちで調べ考えたことを自分の声で伝えたいという気持ちが強く

あった」と記している。そして「私たちができたのは小さな事かもしれないが、山梨の活性化に少しでも役立ててもらいたい」とまとめた。

OPPシートにも「プレゼンテーション能力や提案力など自分にはなかった力が身についたという点で大きく変化した」、「自分の意見や考えを人前で発表することが苦手だったが、よい体験ができ自信につながると思う」などの記述がみられた。

外部講師や連携先の担当者による評価や感想からも、「中間発表会の時よりも飛躍的に提案の内容、発表の仕方が向上しており、努力のあとが感じられました。発表の際の声も聞き取りやすく、プレゼンのデザインや文字の大きさ、発表時間も適切でした。」という記述がある。

生徒が自身の発表のモニタリングをすることは、プレゼンテーション能力の形成に大きな効果があったと考えられる。

#### (5) 今回の実践から得られたその他の考察

##### ①自己肯定感の高まり

生徒の意識調査や意見文には「自分に自信が持てるようになった」など、自己肯定感が高まったという記述が多く見られ、生徒の変容も観察できた。また、キャリア教育意識調査を4月と12月で比較すると、図1のように自己肯定感の項目では、4月には肯定が46%に対して、12月には73%と他クラスと比較しても増加が顕著である。

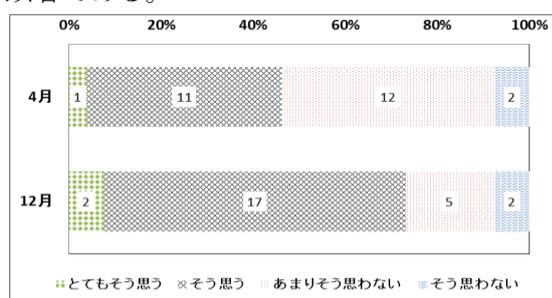


図1 自己肯定感の項目の比較

##### ②他班の発表を見ることで自班を振り返る

中間発表会や本番前のリハーサルをすることは、「発表のリハーサルの時には、他の班との遅れを痛感しました。しかし、1人でかかえ

ても何の解決にもならないことに気づき、班の人と協力し、意見を出し合いはじめると、どんどん遅れを取り戻しはじめられました」と記述しているように、他班の進捗状況を知り、自班の進捗状況を客観的に把握できる機会にもなっていることがわかった。

##### ③外部の反響が達成感につながった

新聞に生徒の意見文が取り上げられたことで、地域のお年寄りから感激したという手紙が届き、生徒との交流があった。また、生徒たちの成果物が掲載された山梨県観光部が作成した観光PRのリーフレットである「観光&イベントブック」は関東近郊のあらゆる駅で目につくところに置かれ、反響は大きく、生徒の達成感につながった。

## 6. 今後の課題

生徒が、今後同じ活動をするときに改善したいと思うことを挙げた、「情報収集の量」や「計画性」については今後の課題としたい。また、USBの情報のバックアップをあげた生徒もいたが、これはプレゼンの寸前にパワーポイントが消えるという出来事があったためなので、情報の管理については事前に教授していきたい。

教員アンケートからの課題は、単元の実施時期があげられた。今回は3年生の4月から実施したが、遅くても2年生の3学期からは開始したいと考える。

## 7. おわりに

生徒の学びのプロセスを意識して地域課題解決の授業実践をし、課題解決能力やコミュニケーション力に加えて、生徒の自己効力感や学習意欲の高まりを強く感じた。今後も探究的、協同的な学びの質の向上を目指して研鑽していきたい。

## 8. 参考文献

文部科学省/今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開/2013.7